歴史地理学　45―1（212）1～2　2003.1

〔シンポジウム趣旨説明〕

移民・植民の歴史地理

杉浦　直・平井松午

共同課題「移民・植民の歴史地理」についての歴史地理学会の会告（『歴史地理学』第42巻第4号）によれば，「国際化の進展，異文化への理解，外国人労働者や難民の受け入れなどが課題となっている21世紀を迎え，過去の移民・植民の過程や地域社会への同化，あるいは宗教・民族の対立などについて，歴史地理学会としての認識を深める必要性」が問題提起されている。

移民国家として存立してきた新大陸諸国，それにアフリカ・アジアの旧植民地諸国から多数の移民を受け入れているヨーロッパ諸国，あるいはその地理的分布が世界規模に及ぶ華人（華僑）やインド移民の事例にみるように，移民・植民という現象は，通時的かつ汎世界的な現象である。こうした現象はとくに，近代化・資本主義化のプロセスや近代国家の形成・成熟にかかわって，大規模かつ広範に発生し顕在化してきたという点で，極めて近代的な所産といえる。

他方，多様な社会経済的要因によって引き起こされる「移民」は，狭義には国家主権が及ばない他国・地域へ一時的あるいは恒久的に国外移住する移動者を指すのに対して，「植民」は国家主権の及ぶ地域への移住や拓殖，経済活動を目的としている点で，両者は性格を異にする。もちろん，植民活動は第二次大戦後にはほぼ消滅しているが，歴史地理学的視点に立てば，両者は並列されるべき対象・テーマでもある。

翻ってみると，近代化の過程において，わが国からも困窮化した農村問題に起因する移民が多数簇生し，その内在的要因のみならず，北米地域におけるアジア系移民の排斥運動のように，外的な社会的・政治的影響の下に多様な展開を見せた。そして、在日朝鮮人問題や中国残留孤児問題，バブル経済期に急増した外国人労働者に代わる日系南米人の合法的受け入れなど，第二次世界大戦前のわが国の移民・植民活動が，現代日本における国際問題の遠因になっている場合も少なくない。こうした今日的な課題については，産業構造と労働力移動，エスニシティや文化変容，エスニック・グループの社会参加などが，経済学，社会学，文化人類学，政治学といった分野からも注目されている。

また，歴史学分野においても，移民・植民をテーマとしたシンポジウムがたびたび開催され，学会誌には特集も組まれてきた。さらに近年，移民・植民に関する講座本の発刊や資料の復刻が相次ぎ，1991年には日本移民学会が創設されるなど，その研究成果は膨大な量にのぼってきている。もちろん，地理学においても，社会地理学，文化地理学，あるいは経済地理学，都市地理学などの視点に立つ移民研究が蓄積されきており，日本地理学会においても「移民・移住とエスニシティ研究グループ」（代表：杉浦　直）が活動を行っている。

しかしながら，歴史地理学会もしくはわが国の歴史地理学研究に限定すると，移民・植民をテーマとするシンポジウムの開催は，今

回が初めてのことである。これは，わが国の歴史地理学研究にあって，これまで当該部門の研究蓄積が必ずしも多くはなかった事情とも関係しようが，“Journal of Historical Geography”誌上において毎号のように近代の移民・植民に関連する研究報告が掲載されている状況に比すれば，その現状はやや寂しい。それゆえ，今日的な国際問題を考える上でも看過できない第二次世界大戦前の「移民」・「植民」というテーマを，今回，歴史地理学会が共同課題として提起したことに，大きな期待を寄せるものである。

なお，平成13年に北海道紋別市の道都大学で開催された第44回歴史地理学会大会では，北海道の殖民地区画に関する2講演のほか，共同課題である「移民・植民の歴史地理」をテーマとする10本の研究発表が報告され，その中から，わが国の内国植民地として開発が進められた北海道に関する5篇の論文が，『歴史地理学』第44巻第1号に収録されている。

そうしたこともあって，今回のシンポジウム「移民・植民の歴史地理」では，とくに日本人の海外植民と外国移住に焦点をあて，その移住過程や移住地での適応過程，移民・植民集団の社会的・文化的性格とその変容，移住地に生成した居住空間（集落，都市，移民集中地域）の特性・構造やその形成過程，居住空間の変化・解体といった多様な地理学的側面から報告いただくことにした。ご報告をお願いした6名の方には，「外地」と位置づけられた朝鮮半島（山元貴継氏）と樺太（三木理史氏）における植民活動，それにハワイ（飯田耕二郎氏）・アメリカ合衆国（矢ヶ崎典隆氏）・カナダ（椿真智子氏）・南米（石川友紀氏）における移民活動について，事例研究を踏まえての報告をお願いした。また，コメンテーターには，日朝関係史がご専門の木村健二氏，ハワイ移民のエスニック構造に詳しい久武哲也氏，チャイナタウン研究者として知られる山下清海氏にお願いした。

報告内容やコメントについては本特集号に掲載されているので，その紹介は割愛するが，シンポジウム後半部の総合討論では，コメンテーターや報告者，それに会場の参加者からも，地理学における移民研究の一般化・モデル化の必要性や，地理学において蓄積されてきた研究成果の他分野への貢献が求められた。そうした声に応えるためには，研究者ごとに異なる問題関心・研究手法を集約するような理論的なフレームワークの構築が必要となるが，今回のシンポジウムがこうした課題解決に向けて意義ある第一歩となることを祈念してやまない。

なお，この特集号では，コメンテーターと報告者の質疑内容を「シンポジウム討論」の冒頭に加えた。報告内容に関わるコメントについては，従来通りコメンテーターにご寄稿いただいているが，それだけではコメンテーターの質問に対する報告者の回答という，シンポジウムの一番の妙味が損なわれると考えたからである。ただし，その内容についてはシンポジウムの総合討論と同様に，紙幅の関係からその要点のみを掲載せざるを得なかった。今回は，それを補い，上記の課題に少しでも応えるべく，杉浦によるシンポジウム総括もあわせて掲載した。

最後になるが，シンポジウム会場となった和歌山市民会館に隣接する和歌山市立図書館の「移民資料室」では，今回のシンポジウムにあわせて資料の公開展示が行なわれ，地元の和歌山地理学会には長時間にわたる会場運営でお世話になった。記して深謝申し上げる。

（岩手大学人文社会科学部・徳島大学総合科学部）